

# 2022鈴鹿・近畿選手権シリーズ第5戦 鈴鹿サンデーロードレース RACE REPORT

## ■開催概要

- シリーズ名称 : 2022 鈴鹿・近畿選手権シリーズ第5戦 鈴鹿サンデーロードレース
- 主催 : ホンダモビリティランド株式会社 鈴鹿サーキット
- 会場 : 鈴鹿サーキット フルコース (2輪/5.821km)
- 参加台数 : 総参加台数/248台
  - CBR250RR Dream Cup ..... 21台
  - CBR250R Dream Cupエキスパートクラス..... 26台
  - インターJ-GP3..... 7台 (内、NSF250R..... 3台)
  - ナショナルJ-GP3..... 18台 (内、NSF250R..... 9台)
  - インターJP250 ..... 4台
  - ナショナルJP250..... 18台
  - ナショナルST600 ..... 42台
  - インターST600..... 15台
  - ST600R (Revival) ..... 27台
  - ナショナルST1000..... 28台
  - インターST1000 ..... 15台
  - インターJSB1000 ..... 27台
- 開催日 : 2022年7月9日(土)・10日(日)
- 天候・路面 : 9日(土) / 曇りのち雨のち曇り・ドライ→ウェット 10日(日) / 雨・ウェット

## ★次回レース予定

2022鈴鹿・近畿選手権シリーズ第6戦 鈴鹿サンデーロードレース

- 開催日 / 2022年9月18日(日)
- 会場 / 鈴鹿サーキット 東コース (2輪/2.243km)
- 開催クラス / インターJSB1000、インター / ナショナルST1000・ST600・J-GP3・JP250、ST600R (Revival)
- 主催 / ホンダモビリティランド株式会社 鈴鹿サーキット



★レースリザルトはインターネットでご覧いただけます。  
[https://www.suzukacircuit.jp/result\\_s/](https://www.suzukacircuit.jp/result_s/)



★レース写真は、バトルファクトリー様のHPで  
ご購入いただけます。  
<http://www.battle.co.jp/>



2DAYS大会となった鈴鹿サンデーロードレース第5戦。7月9日(土)に行われた公式予選では開始直前に雨が降り始め、急速タイヤへの交換が求められたカテゴリもあった。※写真はナショナルST1000の公式予選コースイン直前

# 鈴鹿8耐／鈴鹿4耐〈ST600〉を目前にして 熱いバトルが展開された 鈴鹿サンデーロードレース第5戦

2020年と2021年は新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて開催が見送られた鈴鹿8耐。3年ぶりに開催されようとしている今シーズンの鈴鹿8耐までひと月を切った7月9日(土)・10日(日)の2日間に渡り、鈴鹿サンデーロードレース第5戦が開催された。

昨年までこの鈴鹿サンデーロードレース内で行われてきた「CBR250R Dream Cupエキスパートクラス」と「CBR250RR Dream Cup」の2カテゴリーは移行期間として今シーズンは年間全4戦中3戦が「FUN & RUN! 2-Wheels (通称“ファンラン”)」と併催されながらサンデーロードレースのシリーズ戦として開催されている。今回はその3戦に該当しない1戦、しかも今シーズン初のフルコース大会ということで、「参加して楽しむレース」というニュアンスが強い“ファンラン”とは違い、「純粋に速さを争う競技」としてピリッとした雰囲気漂う中で9日(土)に公式予選と決勝レースが行われた。

翌10日(日)はその2カテゴリー以外の決勝レースが開催された。最初に行われたのはインター／ナショナルの混走によるJ-GP3のレース。このカテゴリーにはステップアップを狙う若手ライダーが毎戦多く参戦を果たしている。今回も計17名ものティーンエイジャーが集結し、ファイナルラップの最終コーナー立ち上がりまでひと時も目を離せないバトルを展開した。その他のカテゴリーのレースも盛り上がった。第2戦に37台、第3戦にはなんと49台が集結したナショナルST600には今回も42台という多くの台数が参加。ドライからウェットへと路面状況が移り変わる難しいコンディションの中、熾烈なタイムアタック合戦が行われた予選、ウェットレースとなった決勝ともに見どころが多かった。

今シーズン初めてのフルコースを使った大会となった第3戦に続くフルコース大会だった今回はインターJSB1000／ST1000に鈴鹿8耐の、インター／ナショナルST600に鈴鹿4耐〈ST600〉のテストを兼ねて参戦するライダーやチームもあった。さらに、今シーズンから「車両銘柄賞」として車両メーカー別でその最上位選手に車両メーカー様から副賞が提供されているJP250のレースでもメーカーNo.1の座を掛けた好走が披露された。

次戦は鈴鹿8耐の約1カ月後に行われる9月18日(日)の第6戦。厳しい残暑が予想される中でのレースにも是非注目していただきたい。



今季は“ファンラン”への移行期間として開催されている「CBR250R Dream Cup Eクラス」と「CBR250RR Dream Cup」。今回はサンデーでの開催となり、いつも以上にアグレッシブなレースが展開された。※写真はCBR250RR Dream Cupの決勝レーススタート直前

### ■ CBR250RR Dream Cup

4番グリッドスタートの曲谷洋介が良いクラッチミートを披露してポールポジションスタートの岩月寿樹に並ぶ。しかし、ホールショットを奪ったのは5番グリッドスタートの岡田純一。2番グリッドスタートの福井宏至が岡田をパスしてトップに立つ。西ストレートで岡田が再び福井の前に。福井が岡田を抜き返すと、その福井、岡田、6番グリッドスタートの楠留維のオーダーでオープニングラップを帰ってくる。福井と岡田はその後抜きつ抜かれつバトルを展開しながら3番手以降を引き離すことに成功。福井、岡田のオーダーでファイナルラップに突入したが、岡田が福井をパスして逃げ切り、トップチェッカー。楠が3位表彰台。岩月が4位となったことにより、チャンピオン争いは最終戦に持ち越しとなった。



CBR250RR Dream Cup (優勝: 岡田純一、2位: 福井宏至、3位: 楠留維)

### ■ CBR250R Dream Cupエキスパートクラス

ポールポジションスタートの竹本倫太郎が良いクラッチミートを披露してホールショットを奪う。それに3番グリッドスタートの大田雅裕、4番グリッドスタートの柴田真優姫と続く。4番手以降を引き離したその3台の中で力走を披露したのは柴田。柴田はヘアピンで大田をパスすると、竹本、柴田、大田のオーダーでオープニングラップを終了する。2周目のデグナーカーブひとつ目で柴田が竹本をもパスしてトップに。竹本がスプーンカーブでトップに返り咲く。一時的にトップ集団は竹本と柴田の2台になるが、5周目に再び3台での争いに。5周目のシケインで柴田がトップに。柴田、竹本、大田のオーダーでファイナルラップへと突入したが、大田が大逆転してトップチェッカー。2位は竹本。柴田が3位となった。



CBR250R Dream Cupエキスパートクラス (優勝: 大田雅裕、2位: 竹本倫太郎、3位: 柴田真優姫)

### ■インターST600

ウェット宣言が出され、10周から8周に減算されたことに加え、ウォームアップラップで転倒したマシンがあった影響により、さらに1周減算され、7周で争われたこのカテゴリーのレース。ホールショットを奪ったのはポールポジションスタートの鈴木大空翔。それに堀井颯大、成田彬人とグリッドのオーダー通りに続く。鈴木(大)はスタート直後から後続を引き離しにかかる、オープニングラップ終了時点で2番手以降に3秒062のアドバンテージを築くことに成功。堀井も単独2番手となる。堀井に続く3番手まで浮上した鈴木慎吾の後方で成田、辻本範行、鈴木悠大、村瀬豊、福田琢巳が4番手グループを形成する。結局、鈴木(大)が12秒475ものアドバンテージを築いて堂々のポールtoウィン。堀井が2位チェッカーを受けた。



インターST600表彰式(優勝:鈴木大空翔、2位:堀井颯大、3位:鈴木慎吾)

### ■ナショナルST600

ポールポジションスタートの三上真矢と3番グリッドスタートの高居京平が横並びの状態1コーナーへ。三上がホールショットを奪うと、そのまま早くもオープニングラップから後続を引き離しにかかる。その若干後方で7番グリッドスタートの遠藤晃慶が単独2番手を走行。塚原溪介、高居、中堀拓己、平城雄飛の4台が3番手の座を争う。S字コーナーで転倒したマシンがあったことにより、赤旗が出されてレースは中断。リスタート後も高居が良いクラッチミートを披露してホールショットを奪うが、S字コーナーで三上が高居をパス。遠藤も高居をパスして2番手に浮上。しかし、その遠藤がスプーンカーブで転倒する。単独トップの座を築いた三上が13秒061ものアドバンテージを築き、ポールtoウィンで今シーズン2勝目を飾った。



ナショナルST600表彰式(優勝:三上真矢、2位:大中真次、3位:平城雄飛)

### ■ST600R (Revival)

ポールポジションスタートの関口智大が良いクラッチミートを披露してホールショットをゲット。それに榊原健二、東勇気、小松孝章とグリッドのオーダー通りに続く。小松が東と榊原を立て続けにパスして2番手に。関口、小松、榊原のオーダーでオープニングラップを終了する。それに続くのは7番グリッドスタートの森本光哉。森本は区間トップタイムをマークしながら榊原のテールを狙う。小松が4周目のデグナーカーブふたつ目立ち上がりで関口をパス。同じ周で森本が榊原をパスするが、その森本がシケインで転倒。小松、関口、榊原はそれぞれ単独走行となりかけるが、6周目に関口が小松をパスしてトップに。関口と小松が横並びでファイナルラップへと突入すると、関口が130Rでオーバーラン。小松が2連勝を飾った。



ST600R (Revival) 表彰式(優勝:小松孝章、2位:関口智大、3位:榊原健二)

### ■インターJSB1000

ポールポジションスタートの片平亮輔が良いクラッチミートを披露するが、ホールショットを奪ったのは2列目5番グリッドスタートの阿部真生騎。阿部、片平、2番グリッドスタートの仲村優佑がスタート直後から激しいバトルを展開する。仲村、阿部、片平のオーダーでオープニングラップを終了。2周目の130Rで阿部がトップに返り咲くと、3周目の西ストレートでは仲村が阿部をパスして再びトップに。周回ごとに抜きつ抜かれつのバトルを展開するその2台の後方を走る片平が5周目にミス。その後もテールtoノーズのバトルを続ける仲村と阿部の2台に再び片平が接近していく。7周目に阿部をパスした仲村がスパートをかけてこれを引き離すとトップチェッカー。終盤に片平が阿部のテールを捉えるが、阿部が2位となった。



インターJSB1000表彰式(優勝:仲村優佑、2位:阿部真生騎、3位:片平亮輔)

### ■インターST1000

ポールポジションスタートの中村修一郎がウィリーして若干出遅れる。ホールショットを奪ったのは2番グリッドスタートの可部谷雄矢。可部谷はそのまま後続を引き離しにかかる。それに続くのは中村と4番グリッドスタートの澤村元章。可部谷、中村、3番グリッドスタートの田中信次、澤村のオーダーでオープニングラップを帰ってくる。その4台がトップグループを形成。可部谷と中村が田中以降を引き離すと、3周目の2輪専用シケインで中村が可部谷をパスしてトップに。同じく3周目のシケインでは澤村が田中をパスする。中村は次第に単独トップに。可部谷も単独2番手となる。インターJSB1000との混走によって争われた第2戦でポールtoウィンを決めた中村は続く第3戦と今回もポールtoウィンを決め、開幕3連勝を飾った。



インターST1000表彰式(優勝:中村修一郎、2位:可部谷雄矢、3位:澤村元章)

### ■ナショナルST1000

3番グリッドスタートの岡部直樹が絶妙なスタートを披露。その岡部がホールショットを奪うが、5番グリッドスタートの吉田愛乃助がすぐにトップに。吉田がオープニングラップから早くも後続を引き離しにかかる。オープニングラップ終了時点で2番手以降に1秒083のアドバンテージを築くことに成功した吉田は続く2周目終了時点では後続との差をさらに広げる。その若干後方では2番グリッドスタートの池田寛之とポールポジションスタートの村田司がテールtoノーズのバトルを展開。次第に池田、村田も単独2番手、単独3番手になりかけるが、越智健仁、中尾泰三、吉原匡徳がその2台をパス。3台が2位争いを展開する。結局、吉田が7秒190ものアドバンテージを築いてトップチェッカーを受け、開幕3連勝。2位は越智だった。



ナショナルST1000表彰式(優勝:吉田愛乃助、2位:越智健仁、3位:吉原匡徳)

■ **インター／ナショナルJ-GP3／  
HRC NSF250R Challenge**

ホールショットを奪ったのは5番グリッドスタートの高橋匠。それに3番グリッドスタートの豊田哲慎が続く。ヘアピンで豊田が高橋をパスしてトップに。豊田、高橋、4番グリッドスタートの大田隼人のオーダーでオープニングラップを終える。10番グリッドスタートの高平理智が一気に順位を上げ、2周目にトップに。高平、豊田、大田、9番グリッドスタートの岡田陽大、高橋の5台が6番手以降を若干引き離してトップグループを形成する。その内の4台が横並び状態で6周目に突入したが、1コーナーで豊田と岡田が転倒。これによってトップに立った高平と金子寛がテールtoノーズの状態となる。高平がトップチェッカーを受けると同時にナショナルJ-GP3のウィナーに。総合2位の金子がインターJ-GP3を制した。



インターJ-GP3表彰式(優勝:金子寛、2位:大田隼人、3位:八尋春葵)



ナショナルJ-GP3表彰式(優勝:高平理智、2位:松島璃空、3位:高橋匠)

■ **インター／ナショナルJP250**

2番グリッドスタートの小野拓也がホールショットを奪うが、すぐに3番グリッドスタートの藤田武蔵がトップに。藤田、ポールポジションスタートの羽根巧、小野、6番グリッドスタートの南博之のオーダーでオープニングラップを帰ってくる。トップに立った羽根が頭ひとつ抜け出すことに成功したが、雨が強くなったことにより、赤旗が出されてレースは中断。リスタート後も小野がホールショットをゲット。それに南、羽根と続く。南をパスした羽根は小野をもパスして一気にトップに。徐々に単独走行となった羽根が後続に5秒323のアドバンテージを築いてポールtoウインを決めた。「車両銘柄賞」はHonda賞が総合2位の小野に、カワサキ賞が総合15位の下農知司に、ヤマハ賞が総合17位の徳富誠に授与された。



インターJP250表彰式(優勝:羽根巧、2位:森真、3位:隣淳二)



ナショナルJP250表彰式(優勝:小野拓也、2位:南博之、3位:藤田武蔵)



JP250表彰式(車両銘柄賞)(Honda賞:小野拓也、カワサキ賞:下農知司、ヤマハ賞:徳富誠)

**Voice  
of  
Pick up  
Riders**  
-SUNDAY EDITION-  
この日、キラリと光った  
ライダーに一問一答

この日、キラリと光ったライダーに一問一答  
「Voice of Pick up Rider -SUNDAY EDITION-」

インター-ST600クラスで2位入賞を果たした

**堀井 颯大** 選手 (17歳)

(JOYONE RACING / Honda CBR600RR)



**Q. 7月9日(土)は公式予選直前に雨が降ってきました。難しい路面コンディションでしたか？。**

A. 実は路面状況はあまり影響がありませんでした。というのも、アタック1周目で自己ベストを出すことができたので、決勝レース用にタイヤを残すため、1周走っただけでアタックをやめたのです。逆に言うとまだまだ詰められる余地はあったと考えています。

**Q. 決勝レースでは単独2位になると、危なげない走りで2位チェッカーを受けましたね。**

A. ST600で雨はほとんど経験がありません。練習走行の時に5分ぐらいウェット路面を走っただけなのです。さらにマシンのセッティングがまだ完璧ではありません。自分の力でなんとかするしかないと考え、120%の力を発揮し、最後まで集中力を切らさずに走りました。

**Q 昨シーズンはナショナルJ-GP3のチャンピオンを獲得。国際に昇格した今季はインター-ST600に参戦ですね。**

A. 600は初参戦ですが、開幕戦(シリーズ第2戦)ではファイナルラップで抜かれて2位。続く第3戦は3位。勝てないレースが続いています。しかも前回と今回には全日本ライダーも参戦していましたが、やはり技術の差を感じるのでさらに経験を積む必要があると思います。ただ、ランキングはトップのまま。インター-ST600でもチャンピオンを獲得したいです。